様式１　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（表面）

**平成２９年度　東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費　要求書**

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **事業名**  **（要求事項）** | | | コミュニティ・メモリアルマップの作成を通した次世代への記憶の継承 | | | 新規 | |  | | | | | | |
| 継続 | | 開始年度：平成24年度 | | | | | | |
| **代表者** | | | 氏　　名 | 所属部等局名 | | 職名等 | | | | | | | | |
| 岡田浩樹 | 国際文化学研究科 | | 教授 | | | | | | | | |
| **組織構成者** | **学内**  **３名** | | 氏　　名 | 所属部局・職名 | | 役　割　分　担 | | | | | | | | |
| 板倉史明  梅屋 潔  岩谷洋史 | 国際文化学研究科・准教授  国際文化学研究科・教授  国際文化学研究科・非常勤講師 | | 映像資料の保存・利用法検討  現地調査、関連事業との連携  デジタルマップ・データベースの検討 | | | | | | | | |
| **学外**  **4名** | | 氏　　名 | 所属機関・部局・職名 | | 役　割　分　担 | | | | | | | | |
| 政岡伸洋  高倉浩樹  加藤幸治  小谷竜介 | 東北学院大学・文学部・教授  東北大学・北東アジア研究センター・准教授  東北学院大学・文学部・教授  東北歴史博物館・研究員 | | 民俗学、共同現地調査  人類学・震災データーベースとの連携  民俗学、資料の整理・集約  現地コーディネータ | | | | | | | | |
| **要求理由（概要・目的）** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．概要**　本事業の目的は、東松島市、東松島市教育委員会、東北学院大学文学部民俗学研究室と連携し、震災によって全面移転を余儀なくされた被災地の記憶を市民、特に次世代に継承するために、参加型の「コミュニティ・メモリアルマップ」作成をサポートすることにある。東松島市には津波より壊滅的な打撃を受け、その後の全戸移転や復興事業の過程でかつてのコミュニティが「消滅」、変貌せざるを得ないコミュニティがある。震災の記録事態に関しては2014年に『東松島市東日本大震災記録誌』が刊行されたものの、震災以前のコミュニティの記憶を何らかの形で次世代に残しておきたいという現地の声が最近高まっている。これまで現地自治体、住民とジオラマ作成などの可能性に関し検討を重ねてきたが、コスト、保管、維持の問題、特定の地区のみの記録を残すことの問題点などが指摘された。そこで東北学院大学が行っている住民参加型「文化財レスキュー」の由来プロジェクト、小学生による「震災前の家の聞き取り」を参考に、これを地区に拡大させる。この際に東北学院大学、東北大学の研究者・学生と連携しながら、被災者、現地小・中学校の参加型作業でコミュニティ・メモリアルマップを作成し、そこに様々な情報を重ね、「コミュニティの記憶」を次世代に継承する。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **計　画　・　方　法** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．計画**概要で述べた目的に沿って、本事業は、まずモデルケースとして、東松島市大曲地区（全戸移転）に関し、コミュニティ・メモリアルマップを作成する。コミュニティ・メモリアルマップは、デジタルversionとペーパーversionの2種類を作成する。マップの基本ベース作成には、航空写真および住宅地図を利用し、（１）震災直前（2010年）、（２）1990年代、（３）1970年代、（４）1950年代のコミュニティマップを作成する。デジタルベースに蓄積する情報としては、東松島市および現地大学を通し、国土地理院、ゼンリン、航空自衛隊（矢本基地）に依頼する。また河北新報など新聞社から、主に2000年代の大曲地区に関する記事の提供を受け、これを基礎データとする。その上で、東松島市あおい地区会（大曲浜を中心とした集団移転地区）の胸脇を受け、コミュニティについての語りの情報を収集し、かつ大曲獅子舞などコミュニティの民俗行事などの情報を加えていく。高齢者の聞き取りについては「座談会形式」なども有効な方法として採用する。これと平行し、ペーパーベースとして、矢本第一中学校、矢本東小学校に通う児童に、それぞれの過程に「震災前の大曲浜とわたしの家」というタイトルで聞き書きをしてもらい、これを加えていき、住民参加型の世代を超えた記憶をコミュニティ・メモリアルマップに集約し、そのマップおよびその作成過程を記録し、検証する。東北学院大学の学生は民俗学調査実習の一環として、た神戸大学新学部は国内フィールドワークの一環としてサポートにあたる。最終的にはマップ作成過程をモデル化し、東松島市の他の地区（例えば野蒜地区など）に拡大、さらには他の被災地への応用の可能性について検討を行う。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **期待される具体的な効果･今後の展開** | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．期待される具体的な効果**　本事業は、昨年度（2016年度）に実施された「震災復興と失われたコミュニティの記憶の保存と再構築のサポート」（梅屋潔教授代表）を発展させ、現地住民参加型の事業として構想されたものであり、すでに現地住民との信頼関係、東北学院大、東北大学、自治体などとの十分な協議を経ており、被災地のニーズを反映し、実現性も高い。震災後6年が経過し、復興過程も震災を前提とした新しい生活を作る次の段階に来ている。震災発生前後に関しては多くの情報が集められ、記録化が進められてきた。むしろ住民の間には「脱被災地」「脱被災者」志向（震災のことのみ関心を寄せる研究者やメディアへの批判）も現れている。コミュニティの主体的再建のためには、震災前と震災後の生活世界の連続性、不連続性を見つめ、過去と現在をつなぎたいという意識がある。本事業のマップ作成はこうした現地住民のニーズに沿った住民参加型プロジェクトであり、主体的なコミュニティ再構築、復興プロセスへの高い効果が見込まれる。またコストや情報の保存維持の点でも現地の状況に適合しており、他の被災地に汎用しうる。加えて、今後東日本大震災という出来事を長期間のスパンでとらえ直す際に、基礎的な資料となり得る。今回のサポート経費による大曲浜のコミュニティ・メモリアルマップ作成の過程および効果を検証の上、一定の評価が得られた場合、現地住民とNGOを作り、2018年度の東松島市「震災復興リーディングプロジェクト」に応募し、東松島市の他の被災地区に展開する予定である。 | | | | | | | | | | | | | | |
| **平成28年度の成果および平成28年度と平成29年度の取組みの違い（※　継続課題の場合のみ記載）** | | | | | | | | | | | | | | |
|  | | | | | | | | | | | | | | |
| **経　費　使　用　内　訳　・　明　細** | | | | | | | | | | | | | | |
| 費　目 | | 品　名 | | | 仕　様 | 単　価 | 数　量 | | | 金　額 | | | | |
| 旅費・謝金 | | 旅費（神戸⇔宮城）  現地コーディネート謝金（経費）  録音書きおこし、 | | |  | 9  8  12  千円 | 6  10  20 | | | **計** | 540  80  240  **860千円** | | | |
| 消耗品費 | | アンケート（小中学生聞き書き用紙など） | | |  | 10 |  | | | **計** | **10**  **千円** | | | |
| その他  (会議費・諸経費等) | | 資料（ゼンリン住宅地図、航空写真）  複写費 | | |  | 50  10 |  | | | **計** | **60千円** | | | |
| **合　　計** | | | | | | | | | |  | **930千円** | | | |
| **他の事業等での配分状況の有無（現在申請中も含む）** | | | | | | **有** |  | | | **無** | | |  | |
| ※「有」の場合，下記項目を記入してください | | | | | | | | | | | | | | |
| 募集機関名：　　　　　　　　事業名： | | | | | | | 申請中 | |  | | | 採択済 | |  |

（裏面）